

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：32670

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13059

研究課題名（和文）語形成の変化に着目した日本語形容詞の歴史的研究

研究課題名（英文）A historical study of Japanese adjectives with a focus on changes in word formation

研究代表者

村山 実和子（MURAYAMA, Miwako）

日本女子大学・文学部・講師

研究者番号：50783586

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、特に形容詞を素材とした造語法に注目し、形容詞の語形成が歴史的にどのような行われてきたかの解明を目指すものである。その目的のもと、室町期～江戸期を中心に、形容詞を素材として新たな形容詞を二次的に派生する事例が様々に見られるものの、近代以降はその型の多くが衰退する傾向にあることを示した。

また、形容詞を素材とした造語の周辺として、（1）形容詞の接続（「細く（て）長い」のように、並列関係にある複合形容詞と表現内容が重なるようなもの）の史的変遷、（2）形容詞派生動詞の自他対応（「高まる／高める」のような自他対応関係にあるもの）の成立の経緯についての研究も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、既存の形容詞を素材として二次的に形容詞を派生する造語として、「いまましい>いまま【わしい】」のように接尾辞を付加するもの、「【わる】甘い」「【わる】長い」（いずれもその形容詞の程度が過度であることを表す）のように「ワル（悪）」を構成要素とするものなどの事例を報告し、そのような造語法が特に室町期～江戸期にかけて見られるものであることを示した。日本語における造語の歴史上、当該時期に注目する必要があることを示したこと、形容詞を複数用いて何らかの表現を行う際に、どのような方策があり得たか（そこに時代差や傾向があるか）を問題提起したことに本研究の学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to examine how the word formation of adjectives has historically taken place, with particular attention to word formation methods using adjectives as material. The results show that, mainly from the Muromachi to the Edo period, various examples of secondary derivation of neo-adjectives from adjectives were observed, many of which have tended to decline since the Early Modern period.

Therefore, in order to clarify the history of word formation from adjectives, (1) the consecutive series of adjectives with expressive content similar to compound adjectives (e.g. 'hosoku (te) nagai') and (2) the formation of the transitive and intransitive pairs derived from adjectives, were examined based on historical documents.

研究分野：日本語学

キーワード：語形成 語構成 形容詞 派生 複合

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現代日本語(共通語)において、形容詞の新たな造語は臨時一語的なものをのぞいてほとんど行われず、接頭・接尾辞による派生も造語力を失ったものが多い。ただし、形容詞の造語に関する従来の研究は中古、近代を対象とするものが中心的で、中世以降についてはその造語システムの変容を示唆するものはあってもその記述や分析が不足している状況であった。

申請者はこれまで、現代語では生産性を持たない形容詞化接尾辞を対象にその歴史の変遷を考察し、その結果として、既存の形容詞+形容詞化接尾辞による派生が、中世～近世を中心に行われる傾向があることを論じてきた。それらの事例研究を通し、日本語の歴史上、中世～近世の語形成の特徴が「形容詞を素材として二次的に形容詞のバリエーションを増やすこと」であるという仮説を立てていたが、その全体像を解明するには、形容詞化接尾辞だけでなく、接頭辞による派生、複合など多様な造語法に目を向ける必要があった。

2. 研究の目的

本研究では、上記の背景を踏まえ、形容詞を素材とするものを中心に、中世～近世における語形成の傾向を明らかにすることを旨とする。

3. 研究の方法

形容詞を素材とする語形成について、具体的に以下を想定し、それぞれにどのようなバリエーションがあるか、通時的に見たときに生産性に時代的な傾向があるか、といった観点から調査・分析を行う。

- A) 「形容詞語幹+形容詞化接尾辞」型の派生形容詞
- B) 「形容詞由来の接頭辞+形容詞」型の派生形容詞
- C) 「形容詞+形容詞」型の複合形容詞
- D) 形容詞同士の接続
- E) その他

4. 研究成果

以下の研究成果を公表した。(4)(5)は当初計画にはないものであったが、研究を進める中で発展的な課題として着想を得たものである。

- (1) 「かわいい>かわいらしい」「せわしい>せわしない」「あついで>あつくろしい」のような「形容詞語幹+形容詞化接尾辞」型の派生形容詞に注目し、中世から近世にかけて形容詞を素材とした二次的な造語が積極的に行われていたこと、接尾辞による派生が有効に働いていたことなどを提示した。(学会発表「形容詞の語形成史—中世・近世を中心に—」九州大学国語国文学会、2021年6月6日)
- (2) 「わるがしこい」「わるあまい」のように、形容詞「悪い」の語幹(それが接辞化したものを含む)を造語成分とする複合～派生形容詞が見られることを報告した。既存の形容詞に〈過度〉という意味を付加する際、現代語であれば副詞や「～過ぎる」のように分析的にそれを表すが、近世を中心に見られるこの形式では、一語化して(形容詞を素材とした二次的な造語として)見られる点で注目されることを述べた。(雑誌論文「「ワル(悪)+形容詞」の消長—形容詞語形成の観点から—」『筑紫語学論叢Ⅲ—日本語の構造と変化—』風間書房、2021年3月)
- (3) 中古和文において特徴的とされる、複数の形容詞の接続について、その後、歴史的にどのように推移するか、コーパスを用いて調査したものである。特に連体修飾節内の「形容詞+形容詞」について、連体形を並置するパターンに通時的変化が見られることを報告した。(学会発表「歴史コーパスに見る形容詞の接続」「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」通時コーパス活用班・近世グループオンライン研究発表会、2020年12月27日→雑誌論文「歴史コーパスに見る形容詞の接続」『コーパスによる日本語史研究 近世編』ひつじ書房、2023年12月)
- (4) 二次的に派生した形容詞は、元の形容詞の意味を踏まえ、「いかにも～のように見える・感じられる」といった意味を表すことが多いが、その点で「ヨウダ」「ミタイダ」といったモダリティ形式とも関連する。そこで、周辺の現象として、中世における「やう(様)」に注目し、現代語には見られないレ系指示代名詞を承ける事例について報告した。(雑誌論文「中世後期における「レ系指示詞+ヤウ(様)」」『国語国文』91-12、2022年12月)

- (5) 形容詞を素材とした造語に注目する中で、「薄まる／薄める」のように形容詞と共通する語幹を持つ動詞に注目した。それらの動詞の自他対応の体系が一律になっていく中で、それが造語に与える影響について検討した。(学会発表「形容詞語幹を語基とする動詞の自他対応関係の歴史」第298回筑紫日本語研究会、2024年3月29日→雑誌論文「形容詞語幹を語基とする動詞の自他対応関係の歴史」入稿中)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 村山実和子	4. 巻 91(12)
2. 論文標題 中世後期における「レ系指示詞+ヤウ(様)」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 15-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村山実和子	4. 巻 -
2. 論文標題 「ワル(悪) + 形容詞」の消長 形容詞語形成の観点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 筑紫語学論叢 日本語の構造と変化	6. 最初と最後の頁 179-198
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村山実和子	4. 巻 -
2. 論文標題 『日本語歴史コーパス』に見る形容詞の接続	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 コーパスによる日本語史研究 近世編	6. 最初と最後の頁 57-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 村山実和子
2. 発表標題 形容詞の語形成史 中世・近世を中心に
3. 学会等名 九州大学国語国文学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Miwako Murayama
2. 発表標題 The Tendency in the Appearance of Fusion in Early Modern Japanese
3. 学会等名 EAJS2020 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村山実和子
2. 発表標題 歴史コーパスに見る形容詞の連接
3. 学会等名 「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」 通時コーパス活用班 近世グループオンライン研究発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村山実和子
2. 発表標題 形容詞語幹を語基とする動詞の自他対応関係の歴史
3. 学会等名 第298回筑紫日本語研究会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------